

モンテーニュにおける “Présumption”の概念について

高橋 誠

モンテーニュ (Michel de Montaigne, 1533~1592) の思想は、歴史の転換期に群生した思想のうつほ・「一六世紀フラス」を集約すると同時に、それ以後に展開される近代思想の「予想」に満ちている。そして、この実り豊かな思想は、体系なき体系『エッセー』に託され、逆に、その非体系性が、その思想の豊かさを倍加して、これを保障したのである。

この、非体系的な体系でありながら、なお、その実体をなした思想のあまりの豊かさこそ、かれの思索を構成的・全体的に理解しようという多くの試みに、失望を与えてきたもったも有力な原因なのである。

しかし、あらゆる思想家の思想は、その全体系を構造化することを許すいくつかの中心的な範疇をもつ。これと同じように、モンテーニュの思想においても、その体系化を可能にしてくれる中核的諸範疇が存在するはずである。その核心的な範疇を、筆者は、Présumption に求めらる。

この小論の課題は、この範疇を核として、モンテーニュの思想の体系的な把握を試みることにあるのではない。ここでの課

題は、『エッセー』第二卷第十二章「レモン・スボンの弁護」を素材として、モンテーニュ研究史上おそらくは未踏の、しかもきわめて未熟な作業、présumptionの概念規定、を行なうことにある。

(註) モンテーニュのテキストは、つぎの版に依拠し、しかも、引用するテキストは、すべて、一五八〇年の初版に現われた第二卷第十二章「レモン・スボンの弁護」のテキストに限られる。以下、引用は、(699) のように略す。

Michel de Montaigne, Essais, texte établi et annoté par Albert Thibaudet, Bibliothèque de la Pléiade, 1950.

一 人間の本質・Présumption

Présumption (以下、〈妄断〉と訳す) は、モンテーニュによれば、人間の理性のある特定の現実態である。したがって、それは、人間の本質をなす精神能力・人間の理性である。

モンテーニュの抱えた人間には、従来のそれと同じく、理性が宿されている。かれにとって、人間の本質は、とにかく理性である。しかし、その理性は、いまだ可能態のうちにとどまる非自律的な人間の属性なのである。人間の理性を「質料」として理解したところに、かれの理性観の特徴がうまれる。

「……われわれの人間の諸理性・推理 (raisons, discours) は、鈍重で不毛な質料 (matière) のようなものである。神の恩寵 (grace) がその形相 (forme) である。それらに方法 (fa-

con)と価値(Pris)とを与えるのは、神の恩寵である(491、492)と、かれは人間の理性を規定する。この規定は、きわめて、スコラ哲学的な発想に依拠するが、旧教の擁護という使命の達成には、これにまさる有力な論拠はありえなかつたであろう。同時に、この規定は、当時、どれほどに旧教の支配力が人間の内・外界を貫いたか、を顕示している。

この文脈は、かれの理性観が「理性の二重性」にある、ことを示している。まず、人間のうちに存在する理性は、可能態・いまだ規定をうけない質料である。質料は、それ自体では、ものでもなく、なんらの有効性をもたない可能態である。「……それ自身は全く無規定的でありながら、しかもどんな規定でも受け入れることができる……」用意をそれはもっている。かれが、人間の理性を複数化し、これを「鈍重で不毛な」と形容するのは、この意味である。つぎに、人間の理性というこの可能態の質料に「神の恩寵」(このばあい旧教のそれ——筆者)が降ると、その質料には形相が内在されて、人間の理性は理性として規定される。ここで、可能態は現実態として現実化され、人間の理性は、「方法」をえて「価値」の実体を保持するにいたり、それゆえに有効な理性の形式を獲得する。

ここで、モンテーニュにおける「形相」は、旧教の神学体系に由来する「神の恩寵」にのみ限定されない。これは、稿を改めて論ずるが、モンテーニュにおける自然と神とは、相互に媒体となる関係にあって、それらは相互に自己同一性を保っている。かれは、この自然観を人間個のうちに個別化し主体化して

いくが、終生、その両者の基本的な関係を修正することなく、これを抱き続けた⁽³⁾。ストアの自然哲学に由来し、レモン・スポンの自然神学を継承し⁽⁴⁾、また、一六世紀フランスにおいて一般的であった、このかれの自然観は、人間の理性の形相として、自然の恵み、をも排除しなかつた。

したがって、それによって人間の理性が理性として現実化される形相は、神の恩寵と自然の恵み、である。かれのうちには、それら以外に、人間の理性を有効な理性として発現させる形相はない。前者に基礎づけられた理性を「神的理性」、後者に基礎づけられた理性を「自然的理性」、と仮名する。

他方、かれにとつて人間の理性が未規定の質料であるとき、前記の形相以外の何かによって現実化された理性がありうる。人間は、理性的・感性的実存として、なかならず実践の実存として、生きるほかないのであるから、人間のうちに「質料」としてあるものは、生の実践に相即して、即自的に「形式」化されなければならない。

モンテーニュがその生涯を閉じた一六世紀フランスの社会は、新・旧両キリスト教の対決を主軸にした、人間の内と外とを貫くあらゆる諸価値の闘争に彩られた。しかも、これを集約した宗教戦争は、ドイツ農民戦争と同じく、その基礎にあった階級闘争の顕現なのである。このような社会を自覚的に生き抜いた人びとは、もはや、伝来の旧教にのみ、みずからの精神を託す勇氣をもつことはできなかつたはずである。あるいは古代から復興され、あるいは新たな生活体験から創生した諸価値

が、かれらの精神を捕えたであろう。時代は、もはや、理性の「形相」を、旧教による神の恩寵にのみ限ることを許さなかったのである。旧教の信仰真理の論証に奉仕するという使命から、理性は解放されなければならなかった。

モンテーニュは、理性が旧教(自然)の枠を逸脱して行使された典型的な事例を新教の発生にみたが、かれは、旧教となんらかの形で対立する理性を、いずれも、その有効性を保障する形相の欠落した理性である、と規定した。それゆえ、「……人間の理性は、いたるところで道に迷うばかりであり、それが神的諸事物にかかわるときには、特別そうである。……それがこの偉大な共通の道(ローマ教会によって描かれ踏み固められた道——筆者)を失うやいなや、理性は、ばらばらになって、さまざまの何千ともない途に散逸する」(588) ほかないのである。中世以来の形而上学的神学体系の支配を打破しつつあり、しかも、いまだそれを決定的に覆えず新たな価値体系の出現をみていない一六世紀フランスの現実を、この人間の理性の規定は、鮮かに再現している。

形相を欠いた人間の理性、これが、〈人間の理性〉である。〈人間の理性〉は、なんらかの形態で反旧教にかけたあらゆる精神、そして、その意味における人間の理性の現実態である。

モンテーニュにおける理性観は、質料として人間のうちに存在している人間の理性が神(自然)の恵みを形相とするかしないかに対応して、〈神(自然)的理性〉として、あるいは、〈人間の理性〉として、現実化される、という〈理性の二重性〉に

ある。

〈人間の理性〉は、それゆえあくまで、人間の本質である。

そして、人間の理性能力である。

モンテーニュのことは、〈妄断〉は、実は、この〈人間の理性〉の形式と実体とをもっとも適切に意味しうることはないのである。したがって、〈妄断〉は、かれにおいては、人間の本質であり、理性能力である。

〈妄断〉がこの〈人間の理性〉と同値であることを証明するためには、さしあたって、モンテーニュにおいて、〈妄断〉が人間の本質として規定されている、ことを示しさえすればよい。

モンテーニュはいう、「〈妄断〉は、われわれの、生来の(naturelle) 原初的な(originelle) 病(maladie)」(497) と、あるいは、「真実のところ、自然は、われわれの悲惨かつ力弱い存在を慰めるために、〈妄断〉だけを分け与えた、ようにみえる」(547) と。

前者の文脈内では、〈妄断〉は、その機能をとおして現実化された現象形態・「病」を述語としている。ここでいう「病」は、いわゆる病気を指示するのではなく、「精神、心、民族を乱すもの」を含蓄する。かりに〈妄断〉を本質とすれば、「病」は現象である、という関係をこの命題は意味する。それゆえ、この「病」が「生来の原初的な病」であるとき、〈妄断〉も同じく「生来の原初的な」人間の属性なのである。

この命題の主語・〈妄断〉は、後者の文脈内では、その述語

「病」を、同じく一六世紀フランスを投射する「われわれの悲惨かつ力弱い存在」に換言して、創造者・自然の作為によって人間に附与された、とされている。神と自己同一を保つ自然の営為は、あたかもそれ「だけ」しか人間がもたないかのような〈妄断〉に、人間を人間たらしめる特徴を与えた、というのである。

したがって、〈妄断〉は、同時に、他の諸動物から人間を識別する指標でもなければならぬ。

人間を他の動物たちに対比したモンテーニュは、「……あらゆる動物のうち、人間ひとり、想像力というこの自由 (cette liberté de l'imagination) と思想のこの奔放 (ce desreglement de pensees) とをめぐっている……それは、人間にとつて、あまりにも高値で買わされた優越性である」(506)と慨嘆する。ここで、「想像力」というこの自由と思想の奔放は、その機能に主点を置いて把えた〈妄断〉にはかならない。〈妄断〉は、他の動物にはみられない、人間に固有なしかも不幸な「優越性」なのである。

〈妄断〉が自然からの人間への賜物であるとき、そして、それが他の諸動物から人間を識別させる唯一の指標であるとき、それは、人間の本質である。

すなわち、モンテーニュにおける〈妄断〉は、たとえば、デカルトにおける「理性あるいは良識 (sens) がわれわれを人間たらしめ、動物たちから区別する唯一のもの……」(7) という、その理性・良識に、あるいは、フォイエールバッハにおける「……

自己の種属や自己の本質性を対象にもって居る者のところにある……」意識、つまり「理性と愛と意志」に、対応する人間の本質である。そして、この〈妄断〉が、モンテーニュにおいては、〈人間的理性〉なのである。

(1) cf. Hauser, H., *La modernité du XVII^e siècle*, Félix Alcan, 1930, p. 13. ヌヴォラ哲学に対決を迫りながら、なお、一六世紀のイデオログたちは、その精神的伝統、思考様式を払拭しきれなかった。

(2) ヘーゲル『小論理学』松村一人訳、岩波文庫(下)、五二ページ。

(3) この時代において、神が上位に立つ神即自然のこの觀念は、かれの弁証法的な思惟の展開を経て、自然が上位に立つ自然即神の觀念に変貌する。これが、その觀念の人間化・主体化であり、これと同時に、かれは人間を発見する。

(4) *Theologia naturalis sive liber creaturarum magistri Raymundi de Sebonde* をモンテーニュはみずから仏訳して、一五六九年に出版した。

(5) モンテーニュにおいては、これらのほかに、みずから批判し分析するにあたって行使している、かれ自身いまだ無意識の理性がある。これは、後にデカルトが抽出して、人間の本質として規定する「批判的理性」である。

(6) Emile Littré *Le dictionnaire de la langue française*.

(7) Descartes, Discours de la méthode, texte établi par Louis Lard, Classiques Garnier, 1960, p. 33.

(8) フォイエルバッハ『キリスト教の本質』船山信一訳、岩波文庫(上)、五五、五八ページ。

II 人間の理性と Présomption

〈妄断〉が〈人間の理性〉に等しいことを確認するためには、両者が等しく基礎を欠くこと、そして、〈妄断〉がいかなる能力によって機能する能力であるか、を示せばよい。

まず、なにゆえに、神・自然の恩寵に浴さない〈人間の理性〉は、その有効性を保障する基礎を欠くことになるのか。これは、モンテーニュの認識論の問題である。

『エッセー』第二巻第十二章を執筆した時代(一五七四?—一五七九?)のモンテーニュの認識論は、きわめて近代的な感覚論を前提する。かれのこの前提は、「……感覚は、人間の認識のはじめであり、終りである」(633)という命題⁽⁹⁾につくされている。人間の認識からは、生得観念の一切が排除される。これは、認識の源泉として感覚のほかに理性を認めざるをえなかったストア哲学の認識論⁽¹⁰⁾や、感覚および内省からえられた観念から知識がうまれるとするロックの認識論、などを越えた純粹な一元的認識論である。

しかし、モンテーニュにとって、感覚は、まったく、信頼できない。かれは、あらゆる認識の源泉であるとみずから認める人間の感覚が客観的対象を把握しえないばかりか、把握しても

誤って受容する、というのである。人間の感覚が事物を正確に受容しえないのは、かれによれば、第一に、真理を確実にしかもその本質において知覚するには人間の五感だけでは不足しているから、第二に、この人間の感覚それ自体が対象を確実に受容しえないから、第三に、本来誤謬に満ちた感覚が情念の起伏によってその誤謬を増加されるから(641—678)である。

感覚の考察にあたって、デイドローに先行して仮説的に盲人を設定した(661—665)モンテーニュは、前者が感覚的経験の人間精神にたいする決定的な規定性への確信へと確かな歩みを進めたのとはまったく逆に、第一に、生まれながらにして感覚を欠く人間がその感覚の欠除をみずから発見するのは不可能である、と確信し、第二に、それにもかかわらずその感覚をあたかも備えているかのように人間が振舞うことへの、非難を越えた嘲笑にいたって、終る。

感覚へのこの深い不信は、モンテーニュが主体的に思索を開始した時代において、何が真理であるか、その真理を真理として判断する公準が何であるか、という判断の基準がいかに混乱していたかを、そして、どれほど急激に社会が変貌を遂げていたかを、物語っている。人間がそれ以外に頼ることのできない感覚をさえ、かれは否定するほかなかったのである。後にうまれるかれの経験主義は、この感覚不信を前提する。

認識の第一原因である感覚の無能力性こそ、形相を欠いた〈人間の理性〉の無根拠性なのである。社会の末端にいたるまでその支配力を及ぼした旧教を何らかの形で否定すれば、その

とき行使される人間の理性は、始源的には、この感覚に依存するほかはない。人間の理性を有効的に保障する形相は、いよいよ、神(自然)の恵みに厳しく限定されてくる。

〈妄断〉は、どのようにして、この〈人間の理性〉の無根拠性に等しいのか。これは、*présomption* の語義を検討すれば明らかになる。

Présomption の語義は、リトレによれば、まず、「証拠の手掛りないしは一応の証拠に基づいてなされる判断行為 (*Jugement*)」である。「証拠の手掛りないしは一応の証拠」は、確認されていない証拠、あるいは誤謬であることをまぬかれぬ基礎、のことである。それゆえ、これに依拠してなされる判断行為は、その経過である推論が正しくても、確実な判断に達することはできない。他方、リトレのいう判断行為は、その同義語が *conjecture*、その語源が *présumer* あるいは *prendre d'avance* であるように、結果としての「判断」ではなく、その結果に到達する過程に働く精神能力である。それは、*action de juger* であり、むしろ、モンテーニュが *raison* としばしば同義に使う *discours* に近い。

〈妄断〉は、語義のうえから、モンテーニュにおいては〈人間の理性〉に等しいことが証明される。すなわち、第一に、〈人間の理性〉がそのあらゆる基礎をおく感覚の不確実性は、〈妄断〉が基づく前提の不確実性に等しい。第二に、〈人間の理性〉が人間に本質的な精神能力であることは、それが精神能力である点において、〈妄断〉の判断行為に対応する。〈妄断〉は、

なかならず、〈人間の理性〉の無根拠性に重点を置いた人間に本質的な精神能力である。

「エッセー」の全編を貫く、人間を含めたあらゆる存在の流転、というかれの存在論は、基本的に、それをなお人間の本質として生きなければならなかった〈妄断〉の無根拠性に、その論理的根拠を与えられている。

理性能力としての〈妄断〉は、ここで、判断行為であるが、モンテーニュのばあい、この判断行為は、具体的にどのような精神能力であるのか。

つぎに、これを能力そのものにおいて検討する。

〈妄断〉は、同じく人間の本質である *imagination* (想像力) を包摂し、しかも、これによって導かれる精神能力である。あらかじめ、想像力が人間の本質であることを示しておかなければならない。モンテーニュは、他の諸動物に人間を比較して、「われわれは、想像し幻想する資産 (*biens imaginaires et fantastiques*) や未来の存在しない資産 (*biens futurs et absents*) をわれわれのものとしている」(537) という。〈妄断〉の同義であるすでに引用した「想像のこの自由と思想の奔放さ」が、ここでいう、「想像し幻想する資産や未来の存在しない資産」である。モンテーニュの語彙では、*fantaisie* と想像力とは同意義である。*biens imaginaires et fantastiques* は、それゆえ、ほかならぬ人間の属性 (*biens*) としての想像力である。これと同値の「未来の存在しない資産」は、非現実的な想像力が人間の本質的属性であることを意味する。

人間の本質、〈妄断〉と想像力との同義性は、すでにほぼ明らかであるが、つぎの二つの文脈におけるそのほぼ同じ意味内容によって証明される。「同じこの想像力の空虚さによってこそ、人間は、みずからを神と等しくし、みずからに神の諸条件を帰している。」(58)「われわれの〈妄断〉の空虚さは、われわれの能力を神の賜物に帰するより、われわれの力に帰する方を好ませる。」(57)すなわち、両者は、いずれも、無根拠性であるがゆえに「空虚」と同格であり、それにもかかわらず、人間にその自己信頼を与える。しかし、両文脈の結びの微妙な差異に、留意すべきである。

類推や推測も、その空虚さにおいて、その機能において、〈妄断〉・想像力にほぼ等しい。「……つぎのほど空虚なことがあろうか。神をわれわれの類推 (analogie) や推測 (conjecture) によって見抜くこととは……」(571)とかれはのべる。Conjecture は présomption の同義語である。そして analogie は想像力の能力に含まれてゐる。

想像力は、しかし、〈妄断〉とまったく同じ機能の能力ではない。〈妄断〉は想像力によって機能する能力である。

想像力と〈妄断〉とはほぼ同じ意味内容をもたせた各原文の一部を抜萃すれば、

“C'est par la vanité de cette même imagination qu'il s'égale à Dieu……”

“La vanité de notre présomption fait que nous ayons mieux devoir à nos forces qu'à sa libéralité

ostre suffisance……”

である。〈妄断〉と想像力との間に横たわる差異の判別は、きわめて困難であるが、あえて行えば、つぎのような区別をすることができようであろう。想像力は、動的な精神的態度を結果するにすぎず、倫理的な価値判断のいまだ及ぶことのできない精神行為それ自体の力である。これにたいして、〈妄断〉は、「好むようにする」の「好む」が明らかに示すように、静的な心的態度を産み出している。静的であるがゆえに、それはすでに価値判断の対象に設定された、あるいは、その判断をすでにうけた、あくまでひとつの倫理的態度である。前者の能力を、仮に、過程あるいは無色とすれば、後者のそれは、結果あるいは有色である、といえる。想像力は、精神能力・〈妄断〉における判断力を、行使する段階に導く精神能力である、といつてよいと思う。

〈妄断〉の判断行為は、モンテーニュにおいては、どれほどに正しい推論の過程を経ても、前提として確実な根拠を欠く前提から出発するほかないのであるから、もはや、幻想に似た想像行為にほかならなくなる。かれのいう想像力は、基礎なき基礎を原初とする判断行為の過程を推進する精神能力である。それによって〈妄断〉が機能する想像力は、〈妄断〉に包摂される同じく人間の本質なのである。

〈妄断〉の能力を荷う能力をこの想像力とせざるをえなかつたところに、モンテーニュが、〈妄断〉を〈人間の理性〉と同値とした論理的な根拠をみるこゝがひびく。

形相を欠いたいわゆる「人間的理性」が、「妄断」である。かれもこれを証言して「各人が自己のうちに捏造するこの見せかけの理性 (discours) を、わたしはつねに理性 (raison) と呼ぶ」(653)とのべている。

このように、「妄断」の諸規定は、現実を厳しく規制されて思惟するほかなかったこの時代のモンテーニュが描いた現実的人間像の基本的な諸規定でもある。ここにみられるかれの現実への深い呼応に留意すべきである。現実を汲むこの豊かな受容性こそ、古典古代の諸思想の追思惟という当時の有力な諸発想法から、かれを脱却させた起因たりえている。そして、この脱却の可能性をたたえた範疇が、この「妄断」でもある。

終りに、モンテーニュの思想におけるこの「妄断」の社会的な意味を要約したい。

第一に、かれにおける現実認識の核心がこの「妄断」にあることである。十六世紀フランスの社会的無秩序を集約した宗教戦争が新教の発生に由来したと理解する。かれは、その発生を「妄断」の成果である、とする。人びとの不安、絶望、野心などのあらゆる悪徳をおびただしい流血の悲劇によって表現した当時の社会的無秩序は、この「妄断」による傲慢を媒介とした人間の人間自身の否定である、とする。かれは、この現実認識に基づいて、「妄断」の否定・除去にそのあらゆる思惟のエネルギーを捧げ、弁証法的に思想を発展させる。ここにおいて、かれは十六世紀を超越するのである。

第二に、「妄断」は、かれの思想に反映した十六世紀フランスの現実を、ある視角から正確に抽出していること、である。旧教の信仰真理の論証以外に行為される理性を「妄断」と規定したことは、当時、旧教がどれほど激しい対決を迫まっていたかを、それにもかかわらず旧教がどれほどに根強い支配力をもっていたかを、そして、いまだそれにとってかわる新たな価値体系が確立されていなかったことを、明らかにしている。

「妄断」は、モンテーニュの思想の豊かさと獨創性とを保障した、かれと現実との接点をなす範疇だといえよう。

(9) ストア哲学の教説をもじりに伝える新懷疑派の懷疑主義者・Sextus Empiricus (三世紀頃?) の主著『Pyrrhōneioi hypotyposēis』のラテン語訳からの借用である。Pierre Villey, *Les sources et l'évolution des Essais de Montaigne*, Hachette, 2 éd., 1933, T. I, p. 243, T. II, p. 190.

(10) *Les Stoiciens, textes choisis*, par Jean Brun, P. U. F., 1957, pp. 19—23.

(11) *Littérature*, op. cit.

(12) *Littérature*, op. cit. 445. Montaigne, *Essais, extraits*, T. II, *Le philosophie*, Classiques Larousse, pp. 32, 33, の脚注。

(一九六四・三・二〇) (一橋大学大学院学生)